

〔講 演〕

宮沢賢治の宇宙

山 折 哲 雄*

〔2005年度文学部主催の秋期講演会では、12月20日、国際日本文化研究センター前所長である山折哲雄先生をお招きして、『宮沢賢治の宇宙』という題でお話いただいた。21世紀は宮沢賢治の時代と山折先生はいわれ、少年期をみずからも花巻で過ごされた先生の同郷の詩人宮沢賢治への思いは熱く、その所論は深い洞察に満ちたものであった。活字化して残す価値があるものと判断し、先生のご了承を得て、ここに掲載させていただくことにした。なおテープ起こしは本学文学研究科研究生の奥野恭平君が行った。梅山秀幸記〕

1. は じ め に

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました山折でございます。

わたくしは関西に参りまして、今年でちょうど満十八年が過ぎました。関西といいましても、京都にずっと住んでいるのですが、それ以前は東京時代がけっこう長かった。しかし、出身は、今ご紹介いただいたように、岩手県の花巻というところでして、そこで中学、高校時代を送りました。その花巻のわたくしの実家というのは、浄土真宗の西本願寺派の寺でした。ほんとうに小さな、小さな寺です。わたくしはその寺を継ぐべき長男だっ

* 国際日本文化研究センター前所長

キーワード：宮沢賢治、花巻、高村光太郎、永訣の朝、とし子

たのですが、途中で抜け出して、弟に譲ってしまいました。しかし、いずれにしろ、花巻が故郷であるには違いありません。そのわたくしの実家の寺から150メートルぐらい離れたところに、今日お話をさせていただきまず宮沢賢治さんの生まれた家がございます。現在も、そのままの形で残されていますが、しかし、昭和20年の8月10日、敗戦の5日前、米軍の艦載機によって焼夷弾が落とされ、花巻市の半分ぐらいが焼けてしまいました。その時に、宮沢賢治の生家は焼けてしまい、どういうわけかわたくしの実家の寺は焼け残ったんですね。賢治の家は焼け落ち、私の故郷の実家は焼け残った。そのことがずっとわたくしの心の負い目としてあって、その負い目の中から、賢治に対する関心が屈折した形で、少しずつ芽生えていったという気がいたします。あまりこういうことは申し上げないのですが、小学生のときは、わたくしは東京で、花巻に参りましたのが、小学校の六年です。花巻におけるわたくしの故郷性というものは、やっぱり中途半端なものになっております。その中途半端な故郷との関わり方が、もしかするとわたくしの宮沢賢治との関係の中途半端な、宙ぶらりんというような関係を方向付けているのかもしれない。そうしたことを、これからお話しすることを通して感じていただければよいと思っております。

II. 花巻の宮沢賢治

実は、その中学生のころに聞いたのだと思いますけれども、わたくしの母親は子どものころから花巻で育った人間でしたから、生前の宮沢賢治のことをたいへんよく知っておりました。それで、あれこれといろんなエピソードを聞かせてくれたのです。その聞かせてくれた話の中で、わたくしが今でも忘れることのできないものがひとつございます。実にたくさんの宮沢賢治論、宮沢賢治評伝というものが出版されていますが、そこでもあまり触れられていないのではないかと、そういうエピソードを最初に

宮沢賢治の宇宙

ちょっと申し上げてみたいと思います。賢治が盛岡の高等農林専門学校を卒業して、やがて花巻に帰ってきて、花巻の農学校の教師になります。そのまま高等農林専門学校に残って研究者の道を歩むようにと、指導教授からは言われたようですが、賢治としては、自分はまず故郷に帰って、農村改良のために働きたい、農村の青年のために自分が学んだことを役立てたいと考えた。そういう使命感に燃えて、研究室に残ることを自ら禁じ、故郷に帰って農学校の教師になるわけです。

そのころすでに、ご承知のように、彼は日蓮宗にのめりこんでおりまして、日蓮宗、あるいは法華経の世界に基づいて、自分の人生というものを新しく設計しようとしていた。その若々しい情熱に燃えていたころですが、その気持ちが行動に現れたのでしょうか、花巻の農学校の教師になつてすぐ、毎年のように、真冬になりますと寒行を始めたというんですね。寒行というのは仏教僧が寒い季節にやる修行ではありますけれども、これにはいろんなやり方があるわけです。宮沢賢治のその「寒行」のやり方は一風変わっておりまして、緋の着物を着て、その上に黒マントを羽織って、それで街頭に出る。凍てつく道を歩きながら、「南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経」と称えながら歩いたのだそうです。それを毎日のようにやったというんですね。そういう賢治の「寒行」の姿を見て、花巻の土地の多くの人々がですね、その賢治の背中に向かって嘲りのまなごしをなげかけ、嘲笑の言葉を浴びせかけたというのです。今は口にはしてはいけないことばですが、「気違い賢治」ということばを浴びせかけていた。母親はそのことばを人々が口にすることをしばしば耳にしたとわたくしに教えてくれました。私はこの話が非常にショックでございまして、なるほど、詩人というのは故郷には迎えいられない存在なのだと、子供心に痛切に刻み付けられたことを覚えております。

その当時、宮沢賢治はいろいろなことに手を出して、ものを書き、童話

を書き、詩を書いていくわけですけれども、そういう賢治の生き方、あるいは文学活動というものを本当に理解していた人間はだれもいなかったのではないか。理解していたのはただ一人、妹のとし子だけだったかも知れない。わたくしはそう思っております。賢治と妹のとし子との間の関係というのもまた複雑で深いものがありますが、そのことについてはまた後ほどふれたいと思います。ただ、いまだにわたくしが疑問に思いますのは、『法華経』の世界にのめりこんで、日蓮宗の行者として生きていこうと決意した青年が、寒中、題目を唱えて歩きまわる、これについては理解できます。しかし、理解できないのは、なぜ彼はそういう修業をする自分の肉体に、黒いマントを羽織ったかということです。これがよくわからない。普通、坊さんが修行して歩くときの姿といえば、まあわたくしの今の作務衣の恰好、これに少し変化を与えた姿をするのが普通であります。なぜ黒マントなのか。わたくしがそれ以来ずっと考えていて、思いつくのは、たとえば十六世紀、ヨーロッパの宣教師が日本にやってきて、京都を中心として宣教活動を始めます。そのころの宣教師たちの姿が「洛中洛外図」という有名な屏風図に描かれていたりしますが、あそこで宣教師たちが羽織っている黒マントがあります。あれが思い出される。賢治は岩手県の花巻という田舎町で、同じ黒マント姿で伝道活動をしていたのではないかと。これが第一の思いつくイメージで、第二のイメージというのは、幕末の開国期にペリーが黒船を引き連れて日本にやってきた。それで砲艦外交を始めて、日本を脅迫した。あの黒船の黒という色のイメージであります。外国からなにかが得体の知れない文明の片鱗を見せて、我々の前に登場するとき、島国に住んでいる人間たちが抱いているであろう驚き、恐怖感、不安感というものが、あの宮沢賢治の黒マント修行の姿を媒介にして、わたくしのイメージに不思議なものを喚起します。黒のイメージというのが、日本歴史の中で、あるいは日本文学の中で、何らかの意味を持つものでは

宮沢賢治の宇宙

ないかということ、わたくしはずっと考え続けています。ただそのことを、宮沢賢治がどの程度自覚的にやっていたのかどうか、その後の彼の作品と照らし合わせて検証しなければならないことだと思っています。これはどうもよくわからない、わたくしにとってはいまだに謎なのですが、今日はその謎ときの一環をお話しようと思って来たのですが、それほど自信があるわけではありません。

Ⅲ．花巻の高村光太郎

わたくしは敗戦のとき旧制中学校の二年生でした。その中学校に通っていて、帰るときに必ず寄るようになった所がありました。自分の家と中学校の中間のところに万葉堂という古本屋がありまして、いつの間にかその古本屋に立ち寄るのがわたくしの習慣になってしまいました。その万葉堂の「まんよう」は『万葉集』の「まんよう」でして、その主人というのは歌人でした。そして、明治以降の日本の文学活動、詩人たちの活動については、実に詳しい知識と情報を持っていた方でありました。その話を聞くのがひとつの楽しみでしたが、それから明治以降の小説家や詩人たち、評論家たちの初版本をたくさん持っておりまして、次から次へと蔵の中から出してきて、見せびらかすんですね。北原白秋の『桐の花』であるとか、あるいは、島崎藤村や室生犀星などの代表的な詩人たちの詩集の初版本を次から次から出してきて、いろんな解説をしてくれたのです。それがおもしろくて、わたくしは毎日のようにその古本屋に立ち寄っていたのですが、実は、そこでわたくしは宮沢賢治が生前出版した唯一の詩集であります『春と修羅』の初版本を見せてもらったのです。そして、この『春と修羅』の初版本を印刷したのは、万葉堂とは道路を隔てて前にあった吉田印刷という印刷所だったんだよ、というような話をしてくれたんですね。そのころわたくし自身、宮沢賢治の世界にいろんな関心を持ち始めていて、

賢治周辺の文学的事件・社会的な事件を、ひとつひとつ教えられていった、そういった体験がございました。

実は、その古本屋の主人というのは松崎さんという方でして、その後、古本屋として大成されます。花巻から仙台に行って、仙台で大きな古本屋を三つほど作って、東北大学などの大学相手に商売をして、どんどん古本屋の商売を広げていきます。そして最後は東京に出てまいりまして、東京でやっぱり三店ほど支店を持つ。現在では東京大学の赤門の前のビルに万葉堂の支店がございまして、その主人はそこで今もお商売をしております。もう九十近くのおじいさんですが、わたくしは今でもときどき手紙のやり取りをしたり、遊びにいたりして、交流は続けております。わたくしにとっては文学上の師匠といってもいいような方なのですが、その松崎さんがですね、敗戦の年の昭和二十年、忘れもいたしません、十月くらいに、「実はこの花巻になあ、高村光太郎が来てるんだよ」と、突然言われたのです。もちろん、当時は中学生のわたくしでも高村光太郎の名声は知っていました。あの悲劇的な智恵子との別れを歌った『智恵子抄』という詩集も読んでいた。その『智恵子抄』の初版本も、その万葉堂で、わたくしは見せられている。その高村光太郎がこの花巻に来ているというんですね。後になって、なぜ彼が花巻の地にやって来たのかを知るようになりますが、そのときはもちろん知りませんでした。高村光太郎が花巻に来てると聞いてからというもの、高村光太郎が花巻の町に出て、買い物なんかもするだろう、その姿を見たいと思ひまして、わたくしは学校から帰ってくると、毎日のように町中をほっつき回りました。高村光太郎の姿探しを始めたわけですが、なかなか見かけませんでした。

その頃ちょうど、光太郎がようやく文学活動を再開し始めます。戦後、東京でもぼちぼち文学雑誌が出版されるようになっていて、ある雑誌に光太郎がエッセイを書きおりました。そのエッセイで、光太郎は、戦争に負

宮沢賢治の宇宙

けた直後の食料の無い半飢餓状態の中で、人間はいかに栄養をとるか。自分の心身をどう維持していくか、それに心を煩わせているのであるけれども、自分は今、その栄養の一環として牛の尻尾を食べることにしていると、そういうエッセイを書いていました。それが奇妙にわたくしの頭の中に残っていて、高村光太郎が牛の尻尾を買うために商店街をうろうろ歩き回っている姿を何とか発見しようと思い始めて、それで探していたのです。しかし、なかなか現れない。十二月の下旬になって、やっと、その光太郎が向こうのほうからとぼとぼ歩いてくる姿を見つけました。高村光太郎という人は、ご存知のように、背が高く、背筋がぴんと真っ直ぐに伸びて、姿勢のいい方であります。刺し子の着物を着て、瓜子^{つまご}という藁で作った靴を履いて、そして風呂敷包みをぶら下げて、ゆっくり歩いてくるんですね。あれは高村光太郎だと、わたくしは気がついた。これは見間違いようがありません。それで、その後ろに回って五メートルぐらいの間隔を置いて、私は後をつけ始めた。そうしたら、光太郎は肉屋の前に行って立ち止まって、肉屋に入っていきました。あー、牛の尻尾を買いに入ったんだと、わたくしはそのとき思いました。そして、しばらく待っていましたら、今度は新聞紙で作った紙袋をぶら下げて出てきました。あの新聞紙の袋の中に牛の尻尾が入っているのだと思って、またしばらく後をつけて、それから別れてしまいました。私は五メートル以上の距離を縮めることができなかつた。相手は偉大なる詩人、わたくしはただの田舎の少年です。

翌日、学校に行って、悪童どもを前にして、「俺は昨日、高村光太郎が牛の尻尾を買いに肉屋に入った姿を見たんだ」と自慢話をしましたら、その友人たちに「お前は、それをちゃんと見たのか、確かめたのか」といわれて、これは確かめていなかったんですね。千慮の一失であります。あの時近づいて聞いておけばよかつたなど、今にして思いますが、だけど、わたくしはあれは牛の尻尾だったと信じているのです。そういうことがあり

ました。

なぜ光太郎は花巻にやってきたのか。それは、ご存知のように、高村光太郎は戦争中、戦争賛美の詩をたくさん書いたわけですね。若き青年たちがその光太郎の詩に励まされて、戦場に行って戦い、そして死んでいった。戦後、多くの文学者たちが戦争責任者として指弾され、非難されることになりましたけれども、その代表的な文学者として、たとえば斎藤茂吉や高村光太郎の名が挙がったわけであります。そのことを彼は知っていた、予感していたわけですね。昭和20年8月15日、敗戦の日を迎えるわけですが、その2、3ヶ月前から彼は花巻にやって来ているわけです。たった一人で、自分を罰するために、北国の寒い寒いところにやってきた。これは自己流謫といってもいいし、自分を罰するための最適の場所として北国を選んだということがあると思いますけれども、それ以上に重要なことは、もちろん彼が宮沢賢治を尊敬していた、宮沢賢治の作品を非常に高く評価していたということがあった、そのことは後になって、ようやくわたくしにはわかるようになったわけです。

宮沢賢治は昭和8年に亡くなっています。その後、彼の文学的業績を評価する詩人たち、文学者たちは必ずしも多くはなかったのですが、いることはいたのですね。もっとも賢治の作品を評価した人物の一人が高村光太郎であり、もう一人が草野心平であります。それで、草野心平と高村光太郎が昭和18年だったか、19年だったかに、宮沢賢治全集を作っております。これは、おそらく戦前戦後を通じて、もっとも優れた全集のひとつでないかとわたくしは思っているのですが、十字屋本といいまして、十字屋という書店からでたもので、その編集委員を光太郎も草野心平もやっております。非常に早い時期に、賢治が死んで間もなくの段階で、その文学的業績を非常に高く評価した人物だったわけであります。その十字屋本全集の「宮沢賢治全集」という題字を書いているのも高村光太郎であります。光

宮沢賢治の宇宙

太郎の書というのはいいですね。わたくしは、「近代三筆」の一人であると思っているくらい好きなんです。光太郎の書というのは、彼の姿勢がピンと背筋を伸ばして凛々しい姿をしているのと同じように、書にもその凛々しさ、凛とした張り詰めた気力のようなものが覆っている、そんな感じの書です。その光太郎が、今申し上げたような理由で花巻にやってきて、昭和二十年から七年間、たった一人で花巻の郊外の山口村というところで自炊生活を始める。厳しい自己処罰の生活でした。

光太郎の自炊生活をした小屋というのは、山で使われていた飯場小屋を移築したものです。わたくしはそこに参りましたが、土間が半分くらい、残りの半分は畳三畳ぐらいいで、土間に炊事道具がごろんと転がっているだけの、非常に貧しい、粗末な小屋でした。そこで七年間、高村光太郎は生活をした。わたくしは中学校を卒業して、やがて大学に入りますが、大学の二年か三年のときに、故郷に冬帰ってまいりました。年が明けて二月に入って大雪が降りました。今年は寒くて数日前に北陸では1、2メートルの雪が降ったというニュースが報ぜられましたが、最近では雪が少なく、東北でも少なくなっていますが、わたくしの子供のころは1、2メートルは当たり前でした。大雪が降った翌日、ふと高村光太郎が生活していた、あの飯場小屋を訪ねてみようと思ひまして、出かけたのです。バスに乗って、小一時間ほど行きますと、その場所に到着します。バスの乗客はわたくし一人でした。なにしろ大雪の中ですからね。それで、光太郎の住んでいた小屋は、その後、光太郎が東京に帰っていきましたので、高村山荘として、一種の文化財としての保存措置を講じられていた、そこに行ったわけですが、100メートルくらい手前のところでバスを降ろされてしまった。見ると一面の白銀の世界であり、もう道がついていない。それで、雪の中を転びながら、這うようにして、その山荘にたどり着いたのです。山荘の立て付けは悪くて、もう隙間風がびゅうびゅうと入ってくるし、雪も舞い込む。

そういう小屋だったということが、実際に行ってみてよくわかりました。いかに困難な生活環境の中で光太郎が生活をしてきたかということがよくわかりました。たった一人で、夜、その小屋にやすんでいて、目が覚めて眠れなくなる。そういうときには、彼はその小屋を出て、後ろに小高い丘があるのですが、その丘の上に登って行って、はるか南の方角にある福島県の安達太良山の方を見て、「智恵子ー。智恵子ー」と叫んだという。彼自身がそういう文章を残していますが、たいへんに孤独な生活をしてたということがわかります。彼のその当時作った詩を読むと、よくその孤独感がわかりますが、わたくしは、大雪の降った翌日に行ったから、特にその小屋での当時の光太郎の感覚がよくわかったような気になったわけです。

そして、その小屋のすぐそばには便所が建てられていまして、これも飯場小屋から移築したものです。その便所はどんな便所かなと思って、近づいていきました。これもがたびしと立て付けの悪い戸があって、それを開けますと、中に大小便が同時にできる穴が開いていた。試みに中に入って閉めてみたのです。すると、下のところにですね、「光」という字を鋭い鑿で削り抜いた明り取りがついていました。高村光太郎の自分自身の名前の文字の「光」という字です。彼の書と同じような風格のある字で彫り抜かれています。その便所に入って、戸を開けて、真っ暗なところで腰を下ろしてみる。すると、ちょうど目線のところにその「光」という明り取りがくる。あー、光太郎は一人で夜、便所に入ったとき、何も夜は別に便所に入らなくてもいいかもしれませんが、その明り取りを見ながら、彼は全身に力をいれ、踏ん張って出すものを出したんだ——そう想像したとき、わたくしは心の底から力が湧いてくるような気持ちになりましたね。この厳しい寒さの中における光太郎の自己処罰の体験というものが、彼のその後の詩の活動、文学活動に非常に大きな影響を与えていったのではないかと、そういったことを感じました。それはちょうど、宮沢賢治が自分の故郷の

宮沢賢治の宇宙

花巻の寒さの中で「南無妙法蓮華経」と唱えながら歩いていた、その寒行の姿とも、そのとき重なりました。やはり、文学活動と風土性というのは深い関係があるように思います。それは何も文学だけじゃない。宗教も、芸術も、すべての問題に関して、その土地の持っている風土というものはいかに大きな役割を果たすか、ある性格を与えるかということをして、わたくしの賢治、光太郎体験というものには教えてくれた気がします。

IV. 宮沢賢治と風

さて、宮沢賢治の問題に戻ってお話を続けると、彼の仕事というのは、詩を書き、童話を書いている。農学校の教師をやり、農村改良運動に入って農業指導者になり、肥料の改良などに携わる。岩石学、地質学、天文学などに関して深い知識があり、それに基づいて彼のイマジネーションがいろいろな形に燃え上がってくる。そういった活動を多彩に展開していくわけですが、その彼の詩や童話、製作の活動全体を見て、非常に印象的なのは、賢治の作品の中にはいろいろな形で風が出てくることです。風が吹いている。風のイメージがいたるところに登場してくるということです。これはたいへん特徴的なことだと思います。『春と修羅』という詩集一編をとっても、毎ページ風が出てくる感じです。それは愛欲の風であったり、野原を渡るさわやかな風であったり、それから、荒海を吹きつる荒々しい風、宇宙の彼方から吹いてくる形而上学的な風であり、神のものに属するような抽象的な風であったり、あるいは自分自身の存在の全体を不安に落とし入れる様な不可思議な不気味な風であり、いろんな風が吹いている。天上には聖玻璃のような風が吹いていて、それに対してこの地上には修羅、一人の悪魔が歩いていて、その修羅の風が吹いている。多彩な風が、彼の詩集の中には吹いています。

特にそれが物語の世界で現れてくるのですが、そのことがわたくしにと

って是非常に面白い。賢治の製作した童話は、不思議なことに風が吹いて物語が始まり、風が吹いて物語が終わるんです。代表的なものが、まず『風の又三郎』です。あれは最初、「どっどど どどうど、どどうど どどう」という風の音から始まっている。九月、台風の子節になって、山間の小学校に、空中から舞い降りるように、マントを羽織った又三郎が学校にやってくる。転校生である。それが、その土地の少年たちといろいろな遊び、交流をして、何日かして、すっとまた姿を消して、風がどうと吹く。「やっぱりあいつは風の又三郎だったな」と子どもたちがいう。わたくしは忘れもしません。中学の一年のときのことです。宮沢賢治が作品の中で「イギリス海岸」と名づけた北上川のある場所があります。二つの川が合流するところで、流れが急速に変わる場所があるのです。そこは夏になると水浴びの場所として、よく友人たちと一緒に遊んでいました。私はそこで溺れたんですよ。そして、その、溺れて大量に水を飲んで、ぶくぶく、ぶくぶくと下に沈んでいった。まあ、二人の大人の方に助けられたのですが、そのときに、不思議なことに宮沢賢治のあの「どっどど どどうど、どどうど どどう」というあの音が聞こえてきた。その翌日、私は水泳ぎを覚えていました。水泳を覚えるためにはいっぺん溺れなければならないという教訓ではありますが、それはわたくしにとっては宮沢賢治の風の物語と深い結びつきがある。これはわたくしの個人的な経験に過ぎませんが。

『注文の多い料理店』もそうですね。あれは宮沢賢治が生前に出版した童話ですが、二人の紳士が動物を狩るために鉄砲をもって山に入っていく。お昼ごろになって、「腹が空いたな」と、どちらかともなく言うと、目の前にすっと料理店が現れるという、そこから話が始まります。「腹が空いたな」といったときに、冷たい風がさっと吹くんです。冷たい風が吹いて間もなく、その直後にレストランが眼前に現れる。そこで、ご承知のよう

宮沢賢治の宇宙

に、二人がそのレストランの中に入って行く。「外套を脱げ」「帽子を取れ」「ネクタイピンを取れ」「靴を脱げ」そういうメッセージが、扉々で示される。それをその通り、着物を脱ぎながら中に入って行って、やがて自分の頭の上に塩をふりかけろとか、コショウふりかけろとかいうメッセージがでてきて、はっと思うわけですね。自分たちは食べるために入ってきたんだけど、ひょっとすると、何者かによって食べられるかもしれない。そういう恐怖感といいますか、不安感が『注文の多い料理店』の主題です。そうして連れて行った猟犬二匹が、状況があやしくなってきたことを察し、また二人の主人が慌てふためき始めたということで、鳴きわめく、鳴きたてるわけですが、その時にまた風がさっと吹く。見ると、その料理店がぱっと消えて、その代わりに枯れ木が現れる。枯れ木に彼ら二人の猟師の着ていた上着とかネクタイピンとか靴とかがぶら下がっている。そこであの物語が終わるわけですが、この『注文の多い料理店』も風が吹いて物語が始まり、風が吹いて物語が終わります。

『銀河鉄道の夜』もまたそうです。これは宮沢賢治がいちばん最後に、晩年になって、書き直し書き直ししながら、書き続けていた童話であり、完成された作品ではないわけですね。だから解釈がいろいろ割れている問題の作品ですが、実はこの『銀河鉄道の夜』という作品も、風が吹いて物語が始まります。主人公のジョバンニが、病気になった母親に薬とミルクを与えている。やがて、ケンタウルの星祭りの夜がやってくる。その晩、ジョバンニは山から山へ、丘から丘へ、森の中を通過して登っていく。そこから話が始まります。そうして町を眼下に見下ろすことのできる場所に出て、天上を仰ぐと、まさに天の川が流れている。満天の星であります。それを見るために仰向けに倒れるんですね、丘の上の草の上に。そうすると、その草の上を冷たい風が吹いてくる。ここでも風です。冷たい風がさっと吹いてきた途端に、天上の彼方から列車の音が聞こえてくる。ゴトー

ン、ゴトンゴトンゴトーンゴトンゴトンゴトーンという列車の音が聞こえる。気がつくと自分はその列車の中に乗って、宇宙を旅している。そういう物語の進行になっています。そのとき、カンパネッラという自分の友人といっしょにその列車の中に座っている。列車がサザンクロスへと昇っていく、空を渡っていく。その途中にいろいろなイメージが現れてきますが、そのほとんどが死のイメージです。十字架が出てくる、死者が出てくる、不可思議な鳥を獲る鳥さしの男が出てくる。人の死を象徴する十字架があらわれる。当時、大西洋で二十世紀最大の海難事故といわれたタイタニック号事故が起きました。賢治はさっそくこの『銀河鉄道の夜』の中に取り入れてますね。タイタニックで犠牲になった二人の姉弟とその家庭教師というのを登場させるわけです。それが列車の中に乗っているわけですが、これはもう当然、すでに死者なんですよ。そして、その旅の一番最後に、自分の友人のカンパネッラが大きなブラックホールのようなところに吸い込まれるようにして死んでしまう。気がつく、たった自分一人だけがその列車に乗っている。そうして、再びこの地上に戻ってくる。そういう話であります。これはこの世に生き返ったジョバンニとあの世へ去っていったカンパネッラ、この二人の友情物語と読むこともできますけれども、もうひとつ、ジョバンニとカンパネッラは共に宮沢賢治の分身であるという読みかたをすることもできる。賢治における生と死の世界が『銀河鉄道の夜』という物語になって展開していく。ともあれ、ジョバンニがこの世に帰ってくるわけですが、そのときまた冷たい風が吹いて、ふっと気がつくと、あの丘の上の草の上に寝っ転がっている自分を発見することになります。だから、『銀河鉄道の夜』もまた、風が吹いて物語が始まり、風が吹いて物語が終わっているのです。

そういう感覚がわかるかわからないかが、宮沢賢治を理解することができるかできないかの分かれ目ではないかとわたくしは思います。風の音を

宮沢賢治の宇宙

聞いて、ただ風が吹いているというふうにしかならない、そういう段階にあってはなかなか賢治の世界はわからないかもしれません。それはわたくし自身もほんとうにわかっているかどうかわかりません。風が吹いている、その風の中の形而上学的な観念とか、自分の愛欲のその底に潜んでいる欲望の根源みたいなものを本当に感ずることができるのかどうか。さまざまな自然現象、人間たちのイメージ、死んでいった人びとの魂を感ずることができるかできないか。ここのところが宮沢賢治の作品を理解するかしないかの非常に重要なところではないかというふうに、わたくしは次第に思うようになりました。そこを評価しなければ、賢治の作品というのは、結局、すべてが未完の作品ではないかという評価になっていくわけですね。プロの文学者たちは賢治の作品に対して評価は厳しいですね。『春と修羅』はもちろんいい作品ですが、彼は詩人として一貫していたか、つまらない詩もたくさん書いているではないか。たとえば後から申しますけれども、『雨ニモ負ケズ』なんていう詩は、あれは詩ではないというプロの詩人がたくさんいるのです。童話作品についても未完成の童話作品が非常に多い。どう解釈していいかわからないものもたくさんある。たとえば、今、小学校六年生の教科書に賢治の作品が採用されていますが、ほとんど『やまなし』という童話なんですね。やまなしって言うのは梨、山で実をつける梨なんですよ。これが川の中に沈んで、川の中で生活をしている蟹の親子がそれを食べるっていう話ですが、そこに至る物語は非常に入り組んでいて、難解です。殺し殺され、食うか食われるかの世界を、彼は童話の世界にしているのですが、その内容が果たして小学校六年の子どもたちに分かるのか、問題があります。これについては、今日はあまり触れませんが、とにかく不思議な話ですね。

ともあれ、宮沢賢治の世界というのは風の世界なんですよ。今日も、わたくしがこの桃山学院大学に来るとき、強い風が吹いておりました。それ

で、ふっと思ったのです。これから俺は風の話をしに、ここの大学に来たんだ、と。

最近、わたくしにも天の声が風に乗ってよく聞こえてくるのです。わたくしも今年、七十四歳です。どういう天の声かというと、「お前、今死ぬるか」という天の声が聞こえてくる。いやな天の声です、これは。七十歳まではこんな声は聞こえてこなかったのです。それが、最近になって、その声が聞こえてくる。それで、大体は、「今はだめだ」と天の声に対して答えることにしている。だけど、ときどき、「ああ、今ならいいよ」と答えるときがあります。十回に一度、二十回に一度ぐらいですかね。今日は駄目だったですね。今日は大学での講演が終わるまでは駄目だ、と。ときどき散歩に出てですね、いい風が吹いて、遠くの山並みが美しく見えて、木々が綺麗に色づいていて、小鳥が囀っている。そういう自然の中に自分の姿がすっぽり入っていつているようなときは、「ああ、今ならいいよ」と答える気になるんですね。しかし、まず滅多にそういうことはない。だけど、もうしばらくすれば、ちがってくるかもしれません。「ああ、そうか。今ならいいよ」というとき、自分は風の世界を少しは感ずることができるようになっているかもしれない。風の世界と一体化することができているかもしれない。つまり、そういう自然のさまざまな現象と自分が一体化しているということが実感される時、「あー、今なら逝ってもいいよ」と、素直に答えることができるのではないか。しかし、普通はそんな状態になれませんか、「今はまだ駄目だ」と答えているわけです。最近、多少、そういう風と対話をする楽しみを覚えたようなところがある。これはやはり年齢がいかないと、なかなか思うようにはいかないかもしれません。しかし、宮沢賢治はわずか三十代ですよ。その年齢で、風との会話を絶えず繰り返していた。これは時代を遡れば、遡るほど、人間は何歳であっても、風と対話を交わすことができたのだと思いますね。鳥の鳴き声と

宮沢賢治の宇宙

の対話も交わすことができた。それを原始的な感覚といたらいいのか、古代的な感覚とっていいのか。われわれの五感というのは、近代になるにしたがって、少しずつ、すべてが損傷を受けて今日に至っています。今では目を見たものしか信用しない。わたくしは最近では大学で学生たちを教えることはありませんが、以前は学生相手に教えていて、よく五十人ぐらいの学生たちを相手に質問をしたことがあるんです。もし今、聴覚か、視覚か、諸君がどちらかを失わなければならない運命におかれたとすれば、どちらを残したいと思うか。聴覚を残すか、視覚を残すか。そういう質問をすると、90%は視覚を残したいというのです。耳は聞こえなくなってもいい。やはり眼を残したい。しかし、どんなクラスにいても、10%ぐらいは視覚を失ってもいい、聴覚を残したいという学生がいるんですよ。あれは不思議ですね。まったくのゼロじゃない。必ず10%はいる。じゃあ、お前はどうかと聞かれると、そのときの気分ですね。そのときの気分で、やはり視覚を残したほうがいいと思うときと、いや視覚なんか無くてもいい、聴覚だけでいいと思うときとがある。不思議といえば不思議なことで、聴覚を残したいという学生たちの10%という中身はいったい何なのか、これをずっと考えているのです。三十年前、二十年前、そして現在と、いったいどういうことになっているのか。それで、わたくしは最後に、教師らしい、つまらないコメントをつけるわけです。

「聴覚を残したいといった諸君、視力を失っても耳の感覚だけ残したいといった諸君は限りなく神に近い。視覚を残そうと思った諸君たちは限りなく悪魔に近い」

それはですね、近代というのは、目で見えたものしか信じない。望遠鏡で確かめることができたもの、顕微鏡で確かめることができたもの、見る事ができたものだけが存在する。望遠鏡と顕微鏡で見ることのできないものは存在しないというのが、自然科学がわれわれに教えたことである。

物理学がわれわれに教えたことであり、ニュートン、アインシュタインが教えたことである。そう大きなことはいわなくともいいのですが、限りなくわれわれの聴覚というものを疑い続けてきたのではないか。

物理学とはいったい何か。二十世紀を代表する学問である物理学とは何かというのは、これは重大な問題です。数学者の岡潔さんという方がいました。たいへんな学者で、ノーベル賞をもらっていてもいい方でした。奇行の多い方だから、ノーベル賞は無理だったのかなとも思うんですが、文化勲章はもらわれました。その岡さんが言うておられますね。いったい物理学が何をやったのか。二つのことをやった。ものを破壊すること。原子爆弾がそうだ、水素爆弾がそうだ。ものを創造したか。ひとつも創造してない。機械的に操作をすることを教えただけだ。機械的な操作、それと、ものの破壊。この二つのことをやったのが物理学だと、岡さんはいうんですね。今日に至るまで、日本の、そして世界の自然科学は、葉緑素ひとつ創造することができないのです。われわれは錯覚しているんです。自然科学が何かを創造したというように錯覚している。自然科学は何も創造してはいないと、岡潔さんははっきりいっています。たしかにその通りで、操作はいたします。その操作の基礎を教えたものが物理学である。操作することによって偉大なる破壊力を、この人類に教えた。こういうことを言う自然科学者はほとんどいません。岡さんはその点だけでもすごい人です。今日は自然科学のことを話す場ではありません。しかし、風、賢治における風の問題というのを突き詰めていくと、わたくしはそういうところまでいくと思っています。

V. 『永訣の朝』——方言の力

その風の問題と深い関わりがあるもうひとつの重要なテーマについてお話を進めてみたいと思いますが、それは妹との関係です。宮沢賢治は盛岡

宮沢賢治の宇宙

の高等農林専門学校を卒業して、東京に出たりしますが、妹のとし子が東京の日本女子大学の国文科を出て花巻に帰ってきて女学校の先生になっていた。賢治は二つ年上、二つ違いの兄妹ですね。ところが大正10年に、とし子は結核が再発して、賢治は花巻にもどります。とし子は11年の11月には息を引き取ります。このとし子を最後の最後まで看病していたのが、賢治とお母さんですね。それで、息を引き取った夕方というのは、寒い霧の降る晩だったようですが、枕元でずっと寝ずの看病していて、ついにとし子は息を引き取った。その妹の死に直面して、賢治はその部屋の襖の中に体を入れて号泣したといわれています。その一晚のうちに、世に有名な三篇の長い詩を、賢治は書き上げるわけであります。その三篇の詩の中で代表的なものが「永訣の朝」って言う詩ですね。これはもう皆さんよくご存知だと思いますが、お兄さんの宮沢賢治が死んでいった妹に呼びかける。これは標準語で呼びかけます。それに対して死んでいった妹が花巻方言で答えるのです。兄と妹のダイアログの形で進行していく詩であります。そのダイアログの中身が標準語と花巻方言の構成になっているわけです。

ちょっと喉が渴きましたので、ここの水をいただいて、この詩を読ませていただきます。ああ、おいしいですねー、この水は。さて、「永訣の朝」の最初のところです。

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ

みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゆとてちてけんじや)

これが最初の一小節ですね。兄が標準語で呼びかける。妹が花巻方言で答える。このダイアログが進んでいく。わたくしは、従来のこの「永訣

の朝」という詩の読み方、解釈の仕方というものに、非常に大きな疑問を持ち続けていました。どういうことかといいますと、この詩の主人公は賢治だ、妹の死による喪失感に絶望的な気持ちになっている賢治の気持ちを詠ったのがこの詩だという解釈が普通にはされています。だから、最初の賢治の標準語で呼びかける言葉、これがあくまでも第一旋律の役割を果たしていることになる。そういう前提で「永訣の朝」は解釈されたり、朗読されたりしてきているわけです。解釈、評論、みんなそうなっています。朗読したCDもたくさん出ていますから、お試しになったらいいと思います。読み方としては、あくまでも標準語が前面に出てきて、能の舞台でいますとシテの役割をはたしている。それに対して妹のほうはですね、その舞台の背後のほうで、低く、控えめに方言で答えているという、ワキの扱いを受けている。

「あめゆじゆとてちてけんじゃ」というのは、妹とし子の、死を前にした苦しみのことばなのですよね。「あめゆじゆ」というのは、雨と雪の花巻方言で、「とてちてけんじゃ」というのは、取ってきて食べさせてくださいという意味です。「あめゆじゆとてちてけんじゃ」——死を前にして、「お兄さんどうかあの糞を取ってきて食べさせてほしい」といっている。しかし、にもかかわらず、彼女は死んでいく。そのときの賢治の心理状態はどうかと考えると、自分の唯一の理解者である妹のとし子が死んでいくのです。自分の人間だけではなく、自分の書いた詩とか童話の世界、そういうものの本質をよくつかんで、深く理解してくれたのは、花巻においてただ一人とし子だけである。日本全国においてとし子だけだという思いに駆られていた賢治がそこにいるわけで、だから亡くなったとき、同じ部屋の押入れの中に全身を閉じ込めて号泣した。そして一気に書き上げたのがこの『永訣の朝』です。すがりつくような思いで、「とし子よ、帰ってきてくれ、帰ってきてくれ」という、そういう気持ちがこの詩には流れ

宮沢賢治の宇宙

ている。これはわたくしの解釈ですが、その時に天のほうから、あるいは地の果てのほうからとし子の声が聞こえてくるんですよ。

「あめゆじゆとてちてけんじや」

その妹とし子のことばが賢治の全身を呪縛しています。あの世とこの世の緊張感、死んでいったとし子が生き残った賢治に対して与えている、生命力といったらいいのか、妹とし子の力強いイメージがああ詩の中には底流しています。そう読み替えたとき、実はシテはとし子の方ではないのか。ワキはむしろ賢治の方ではないのか。そう考えた方が、この二人の関係の深さ、悲しみや苦しみの重さのようなものがよく理解できるのではないかというのが、わたくしの解釈です。だからこの詩は、今までのような読み方をしてはいけません。わたくし流に読み直してみると、これはこう読まなければいけない。

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ

みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ【低い声で】

(あめゆじゆとてちてけんじや)【大きい声で】

下手くそですけど、たとえばこのように読まなければいけない。能楽を思い出していただければ、賢治はお能の舞台におけるワキの旅の僧です。じっと隅に座って、シテの亡霊の声を聞いて見つめている、ことばをひとつも発することなく座り続けている、あのワキの僧の姿に身を置いています。中心人物は妹とし子として読むべきである。そう読んだとき、あの「永訣の朝」という詩の奥行き、深さというものが見えてくるのではないかと思うのです。これはわたくしの持論で、ずっと言い続けていることです。

宮沢賢治作品を朗読したCDはたくさん出されていますが、その中の最高傑作といってよいのは、長岡輝子さんのものです。これは実にいい。長岡輝子さんはもう九十四歳くらいで、もう朗読を実際にされることはなくなっただと思いますけれども、ご出身は岩手県の盛岡なんですね。じつにうまい、上手な、深みのある花巻方言、岩手方言を語る方です。ところが、その長岡さんの朗読においても、「永訣の朝」におけるシテは賢治になっています。とし子にはなっていない。その点が不満ですが、なぜそんなふうになってしまったのかといえば、それは明治以降の日本国家の国語政策というしかありません。標準語、共通語っていうものをまず作らなければ、近代国家としての日本を作り上げることはできない。そういう判断があったのでしょうが、そのこと自体は正しかったと、わたくしは思います。青森県の人間と鹿児島の人間がばったり出会って、通じ合えるようになるためには、やはり共通語を作り上げなければならない。それは意味があったと思います。しかし、だからといって、それぞれの地域に根付いている方言、つまりことばの文化を価値の劣ったものとする必要は無かったはずで、標準語も方言も、どちらも価値あることばなのだという教育をやることもできたのではないかと思うのです。しかし、明治の国語政策が100年も続くと、方言というのは標準語の遥か後ろに退いた第二言語であるという価値観を作り出してしまった。それが教育の現場で当たり前のこととして通ってしまっています。今は地方の時代ということを言い出している。「文化はまさに地方からだ」などと言い出したのですが、もう時すでに遅しです。地方の文化の一番の骨格をなすものは何かというと、それはことばです。方言を大事にしなくて、どうして地方の文化などということができるのか。だけど、実は、長岡さんの「永訣の朝」の朗読は、賢治の標準語のところを読みながらも、その標準語が花巻方言に訛っているんですよ。その訛っているところが面白い。わたくしが真似してみましようか。

宮沢賢治の宇宙

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ

みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

みごとに訛ってるでしょう、標準語が。これはすごいことではないでしょうか。長岡さんは、賢治の標準語を第一言語、シテの言語にしてはいるけれども、その第一言語をみごとなイントネーションで訛らせてしまった。この辺が只者ではありませんよね。そういういろいろな試み、工夫というものが、やはりことばの世界、特に詩の世界では必要ではないかという気がいたします。

そのことに触れてもう一つ付け加えますと、三年ほど前、わたくしは『源氏物語』を京ことばで翻訳し、朗読する試みがあることをはじめて知りました。『源氏物語』の翻訳といたしますと、ほとんど谷崎潤一郎のもの、与謝野晶子のもの、それから円地文子のもの、それから最近の瀬戸内寂聴さんのものまで、いろいろとあります。しかし、全部が標準語じゃないですか。『源氏物語』の翻訳がなぜ標準語でなくてはならないのか。それをだれも疑問に思ってなかったんですね。なぜ京ことばで翻訳しないのか。平安時代の宮廷のことばを現代語訳するとき、現代の京ことばで翻訳するのが、むしろ正道ではないだろうか。なぜ明治以降に人為的に作られた標準語で翻訳しなければならないのか。そのことに谷崎潤一郎は気がついていません。それが不思議でなりません。気がついてはどうしようもなかったのでしょうか。

それで、わたくしは三年前に、『源氏物語』を京ことばに翻訳した方にお目にかかりました。それは京都大学の国文科を出た中井和子さんという方で、長らく京都府立大学で教授をなすった方です。もう10年以上も前のお仕事なのですが、その全巻の朗読まで出ています。これを京都の人がほ

とんど評価していません。私はその第一巻の最初、「いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひける中に」という、あの有名な出だしの京ことばの翻訳の朗読をCDで聴いたときに、もうそのままずっと平安時代の宮廷の世界、美的生活の中へ自然と入り込むことができました。あっ、京ことばの強さというのはここだと思ったのですが、それは『与謝野源氏』でも『谷崎源氏』でも体験できないものです。

それからずいぶんそのことを話してはいるんですが、日本の源氏学界ではそのことをまだ正面から取り上げていない。相変わらず、標準語による源氏翻訳が主流をなしている。おかしなことですが、同じことは近松や西鶴にも言えるわけですよ。西鶴の世界なんて河内ことばでやったらどうですか。面白いと思いますよ。河内弁でやってみたら、『好色一代男』とか『好色一代女』とか。しかし、中井和子さんのような貴重な試みがあるにはあるけれど、それが話題にならないし、もちろん文化の主流にはならない。相変わらず共通語・標準語第一主義で、それは明治以来の国家の政策に乗っかってやっているだけのことです。地方の反乱などといい、地方の文化ということを強調するなら、そうしたところを変えていかなければいけないだろうと思いますが、そういうことをわたくしに最初に自覚させ、意識させてくれたのは、やはり『永訣の朝』の、あの方言です。どうしても妹のとし子のことばを中心に解釈しないと、賢治の生きた魂の世界、あの故郷の世界の深いところがわからないと思ったのです。

VI. 『オホーツク挽歌』——とし子の魂を呼び求める旅

とし子が亡くなって、一年、いや八ヶ月ぐらいたって、翌年の八月に、賢治はトシ子追悼の旅に出ます。自分で追悼といっているわけではありませんが、旅に出る。北海道から樺太までの旅をしております。これがたった一人で、貧乏旅行です。汽車に乗ったり、バスに乗ったり、歩いたりし

宮沢賢治の宇宙

て、ずっと樺太まで行く。そのとき、行く先々で作った詩をまとめて、後に『オホーツク挽歌』という、大部な詩集になります。オホーツク海を彷徨するような旅をして詩を作り、それに「挽歌」とつけたわけです。これはやはりトシ追悼の旅であり、詩集なんですね。「挽歌」というのは『万葉集』にでてくるあの挽歌であって、死者を悼む歌のことです。『万葉集』でいいのは、相聞の歌と挽歌と二つありますね。愛の歌と死者を悼む歌。その死者を悼む歌を意味する「挽歌」という、万葉以来の由緒あることばを使って、自分の詩集のタイトルを『オホーツク挽歌』とした。

賢治が旅をしている。海岸を歩いている。そうすると向こうに雲が、むくくと湧いてくる。空の方から、ここでまた風が吹いてくる。風が吹いてくると、とし子のイメージを彼はそこに見るわけですね。そこで「とし子ー」と叫ぶ。『オホーツク挽歌』にはそうした詩があるわけですが、とし子が亡くなって、賢治はずっととし子の魂を追いかける。とし子の魂を宇宙の彼方に、自然の彼方に追い求めて旅に出て行くわけです。旅とは、しかし、本来そういうものかもしれません。この世を去っていった大事な人、愛しい人、そういう人の魂を追いかけて旅にでる。これも万葉以来の伝統であります。それを彼は十分に意識している。

青森県には津軽半島と下北半島という二つの半島があり、東の方の半島を下北半島といいます。その根っこのところに宇曽利山湖という湖が山の中にあります。そのほとりが「恐山」の霊地です。ウソリがオソレになったのですね。そこは死者が登る山といわれて、東北ではその年に亡くなった人の魂を求めて、魂降ろし、魂呼びをするためにやってくる。七月にこの恐山にいきますと、イタコという一種のシャーマンがいて、テントを二十ぐらい張っている。その前に、その仏降ろしをお願いする人々が何十人も列を成している。わたくしも何度も行きましたが、今日なおそれは続いているわけです。魂呼び、仏降ろしのこういう信仰は100年、200年

さかのぼれば、日本列島のいたるところで行われていた。文明が進み、都市化が進んだ地域からは、そうした風習は失われていきますが、今日なお濃厚に残されているところが下北半島であり、北海道であり、沖縄であるというわけですね。宮沢賢治はそういう信仰文化圏で育っているのですね。わたくしもそうで、東北シャマニズムの文化圏で育った。そういう点で、わたくしは賢治とは兄弟なのでして、だからよくわかるんですよ。

とし子が死んで八ヶ月がたった後、賢治はとし子の魂を追いかけて、魂呼ばいのために、あるいは仏降ろしのために、恐山のそばを通過して北海道に渡っていくのです。これをどう考えるべきでしょうか。人間の魂とは天地万物の中に宿っていると信じて、風が吹けばその風の中に死者の魂がち現れるという信仰ですね。森に入っていくと、その森の樹木の彼方に先祖の神が宿っている、そういう感覚です。それは縄文時代以来といってもいいし、『万葉集』以来といってもいいのですが、それがこの日本列島の人々のベーシックな信仰、基礎を成しているというのがわたくしの仮説であります。さらにいえば、この仮説は日本列島に止まらない。今から5000年、10000年前、キリスト教も仏教もこの地球上に発生する以前、地球上のどの大陸に住む民族も共有していた感覚が、まさに「万物に生命あり」という感覚であり、意識であり、自然観だったのではないかと思うのです。そういう感覚が宮沢賢治の『オホーツク挽歌』という詩集を創りだしています。『永訣の朝』ももちろんそれと深い関わりがあります。

ただ、「シャーマニズム」だとか「アニミズム」だとかということばは、わたくしはあまり使いたくありません。なぜならば、これは18、9世紀のヨーロッパの哲学者や神学者たちが考えだしたことばであり、そういう万物に生命があるという考え方をシャーマニズム、アニミズムと呼び、もともと未開な、原始的な宗教だと位置づけたわけでしょう。その後、文明が発達することによって多神教の世界が現れ、さらに発達すると一神教の世

宮沢賢治の宇宙

界になるのであり、その一神教の中でも最高度に発展したのがプロテスタントイズムであるということになる。それがヨーロッパの神学者や哲学者たちが考えた宗教発展段階説であり、進化論的な考え方です。そうして、最高度に発展したプロテスタントイズムがもっとも普遍的な宗教なんだという考え方ですね。あるいは、一步譲歩して、どの民族にも伝わり信じられているから、キリスト教や仏教は普遍宗教であるといったりする。しかし、それは嘘です。2000年、3000年の歴史的なタイム・スパンで考えれば、そういう発展段階も考えられるかもしれませんが、5000年、10000年のタイム・スパンで考えたなら、もっとも普遍的なのは「天地万物に生命あり」という感覚であり、これこそがもっとも普遍的だった。そこへ歴史的な宗教が現れ、それぞれの教義を主張し、伝道ということを開始して、それが今日の宗教戦争、宗教対立の問題を生み出していることになります。

そのように見てくると、賢治の作品の底を流れていた、あのとし子の魂に対する彼の考え方、『永訣の朝』とか『オホーツク挽歌』に現れている宗教意識や自然意識こそがもっとも普遍的なものであり、人類全体がある時代共有していた感覚であるということがわかってきます。その普遍的な感覚を明らかな形で詩にしたり、童話にしたりしたのが宮沢賢治だったのです。わたくしは、そこまでいうと、お国自慢といわれそうですが、20世紀を代表する日本の文学者は夏目漱石だけど、21世紀に読まれるべき世界の文学者は宮沢賢治であると思います。漱石から賢治へ、その転換が21世紀ではないかと思えます。

VII. 『なめとこ山の熊』の世界

もうひとつ、この問題と重ねて申し上げたいことが最後にあります。賢治の作品の中に『なめとこ山の熊』という童話がありますが、これはまたすごい話だと思います。まったく恐ろしい童話です。どういう内容かとい

いますと、主人公の小十郎は熊取りの名人です。毎日のように山に入って、熊を猟銃で撃って殺している。そして、殺した熊の皮と肉を町にもって行っては、それを売って生計を立てている、そういう熊取りの名人が主人公です。毎日のように山に入って、猟銃で熊を撃ち殺すときに、小十郎はその熊に向かって言うんですね。熊よ、おらー、なにも好き好んでお前を殺したんじゃない。本当のことを言やあ殺したくないんだ。だけど殺さなければ、俺が生きていけない。だから、仕方なしに殺すんだ。許してくれ。今度生まれてくるときには熊なんぞには生まれてくるなよ、と。まあ、無理なことをいっているわけです。しかし、主人公のそのことばはそのまま賢治の思いだったと思います。だから、小十郎はずっと熊を撃ち殺して生活を立てているけれども、ある夏、熊とばったりと出会う。熊は小十郎に撃たれようか撃たれまいかと思案しているふうだったけれど、あと二年待ってくれというようなことをいう。その通りに約束を守っていると、ある朝、家の前に熊が倒れていた。小十郎も生命が終わるときに、なんだかいつもと違うような感じで出かけて行って、熊にがんとやられてしまう。「おまへを殺すつもりはなかった」と遠くで聞いた気がして、小十郎も「熊ども、ゆるせよ」といって死んでいく。そして、熊たちはその小十郎の遺体をまるく輪になって囲んで何やらお祭りをする。以上が『なめとこ山の熊』という物語です。

それに、『よだかの星』という童話もありますね。「よだか」というとてもみにくい鳥がいる。みにくくて、みんなから仲間はずれにされている。くちばしが耳まで裂けていて、空を飛んでいると、いろんな羽虫とかがどんどん口に入ってくる。そういう虫たちを毎日のように殺して食べることで、そのよだかは生きているわけですが、しかし、みんなから、みにくい姿をしているとあって軽蔑され、差別される。あるとき、甲虫を呑み込んで、背中がぞっとして、だんだん悲しくなっていくわけですね。そして、

宮沢賢治の宇宙

おれはこんなふうにして、毎日毎日、ほかの虫を食べて、ほかの生き物の生命で自分の生命をながらえさせている。もうこんな生き方はいやだと、決意します。もうこれからは一切虫は食べないといって、口を閉じ、そのままずっと空高く飛んでいって、最後は星になって輝いている。これが『よだかの星』のお話です。食べることを自ら拒絶して、死んで星になったという話であります。

『グスコブドリの伝記』という、賢治の一生を象徴するような物語もございます。これも最後に、多くの人々の幸福のために自分を犠牲にするという物語です。しかし、その犠牲の物語と『なめとこ山の熊』の犠牲の物語はちょっと違うと、わたくしは思っています。先ほど申しましたように、人間である熊取りの名人と熊たちとの関係がまったく対等なんですよ。お前を殺したくないんだ。しかし、殺さなければ俺は生きていけないんだ。だから、許せ、もう生まれてくるな。しかし最後は、俺の身体をお前にやろう——そうやって死んでいく。関係が対等ですよ、ギブ・アンド・テイクの関係になる。「食うものは食われる」——この原則にしたがっている物語のように、わたくしには見えるわけです。そういう「食うものは食われる」社会とは、どういう社会だったのか。わたくしは、狩猟社会がそういう社会だったのではないかと思うんですね。わたくしの故郷である花巻、そこからさらに奥に行くと、北上山系に入りまして、そのど真ん中に遠野があります。その遠野を舞台にした『遠野物語』を書いたのが柳田國男であります。山人の世界、山間に生活をする山人たちの生活を採集し、それを文学化した作品です。実に山深いところですよ。その山人たちの生活の基盤になっているのは狩猟社会です。狩猟社会においては動物と人間は、いわば対等の関係で生きていかなければならない。そういう掟の中におかれている社会だと思います。だから、猟師たち、狩猟社会に生きる人間たちは、動物を殺すのが当然です。それで生活を立てているわけですか

らね。しかし逆に、動物のほうも人間を襲って、人間の肉を食べて生きる。これも当然であって、人間たちのほうもその掟を引き受ける社会が狩猟社会だと思います。食うか食われるか、これは対等の関係になっている。すごい社会だと思いますよ。

ところが、これが農耕社会になることによって、考え方が逆転するわけです。人間は動物を殺して、食べてもいい。しかし動物は人間を襲って食べてはいけないという倫理を人間の側が作るわけです。人間中心主義、人間第一主義という、そうした考え方が出てくるのは、狩猟社会から農耕社会へ転換したそのときだと、わたくしは思うのです。そこに仏陀のような動物がいましたら、「何だ人間たちは、勝手なことをいいやがって」というと思います。人間のエゴイズムに対して痛切な批判をしたに違いありません。しかし、その声をわれわれは聞かないふりをして今日まできている。東北のマタギの世界、山人世界というものは、そういう狩猟社会的な倫理とか自然観とかいうのが比較的残っている社会ではないかと思います。そういう狩猟社会に生きた人々の感覚というものを濃厚に継承していた人間の一人が宮沢賢治で、だから、あの『なめとこ山の熊』といったような作品を書いたのだと思います。これは今日のことばで「食物連鎖」といいますか、この地球の生態系は非常に微妙な形で均衡がとれているわけです。「食うものは必ず食われる」——これが連鎖・連環しているということでしょう。強いものが弱いものを食う。弱いものは、また弱いものを食う。その弱いものは、別の能力によって強いものを襲って食べる。最終的に人間も、やっぱりその食物連鎖の中に入っていたはずで、何ものかによって、襲われて食われる。それでもって、生態系のもっとも公平なる秩序が保たれるわけですね。ところが、その食物連鎖という生物界の、いわば黄金率というものをぶち破って、人間だけがその輪から抜け出てしまった。われわれの農耕社会の倫理というのは人間の勝手ではないか。人間だけがこの

宮沢賢治の宇宙

宇宙の生態系の中で、自己中心的で勝手な存在なのだということを、賢治はある段階から次第に考え始めた。それが『なめとこ山の熊』といったような作品に結晶したのではないかと思うのです。

VIII. お わ り に

現在、地球環境問題ということがいろんな分野で、いろんな人々によって叫ばれています。いまさらわれわれは狩猟社会に戻るわけにはいかない。人間中心の、持続可能の開発をしていかなければ、われわれ自身が一日も生きていけない状況に追い込まれている。しかし、いまさら狩猟社会に戻ることはできないし、その戻ることができないという事実をどう受けとめるかというときに、賢治の知恵、賢治の反省、賢治の悲しみというものを、われわれがどれほど共有するかしないか。それが新しい問題として出てくるのではないかと思うのです。今日の環境問題にたずさわるときのわれわれの心構えを、賢治の生き方、賢治の考え方は鍛えてくれるはずだと、わたくしは思っています。しかしもちろん、現実はなかなかそううまくはいかない。やはり人間というのはわがままだし、勝手に、自己中心的な生き物だし、自分の土俵から一歩も外に出ることができない存在である。賢治もそう思いながら、死んでいったと思いますよ。「あー、俺は人間はいやだ。木偶の坊になりたい」、それが『雨ニモマケズ』という最後の手帳に記された、彼の最後の詩の、その最後に出てくる「木偶の坊」ということの意味ではないかと思います。脱人間の絶望的な気持ち、あのことばには表れているのではないかというのが、わたくしのひとまずの結論です。悲しいですよ、人間というのは。宮沢賢治の宇宙というのは厳しい宇宙です。皆さんもいちど東北の花巻を訪ねてみてください。花巻の地からさらに遠野の山奥にまで足を伸ばしてみてください。あの北上山地の奥で、宮沢賢治や高村光太郎たちがどのような生き方をしたのか、想像してみてください。

ください。以上でわたくしの話は終わらせていただきます。